

(浜 松)

静岡・中村遺跡

なかむら

所在地 静岡県浜松市南伊場町

調査期間 二〇〇一年(平14)八月～二〇〇二年三月

発掘機関 財浜松市文化協会・浜松市博物館

調査担当者 鈴木敏則・鈴木 靖

遺跡の種類 官衙関連遺跡・自然流路

遺跡の年代 七世紀～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

浜松市南部には海岸平野が広がり、近年まで数条の砂堤列と湿地が存在した。中村遺跡は、三方原台地直下において、最初に形成された砂堤列上に立地する。

踏線の拡幅に先立ち、一九

九九年から断続的に行なわれてきており、これまでにも古代の木簡が出土している(本誌第二二一・一二三号)。

一九九九年度調査区からは「里人」や、「部」を「ア」

と表記する七世紀に遡る木簡が出土し、また『和名抄』には記載されていないが、現在の小字名「中村」が古代にまで遡ることが判明している。また、遺跡周辺は中世浜松庄の有力な郷の一つである岡部郷の推定地で、発掘調査でも中世の遺構・遺物が多く検出されており、道を中心とした町屋が形成されていたようである。

今回報告する木簡は七点で、いずれも遺跡の南側を東から西へ流れる埋没河川(梶子北大溝)から出土した。古代のものは一点(うち

一点は絵馬の裏面に墨書を確認)のみで、他は中世以降のものである。

古代の資料としては他に絵馬一点がある。この埋没河川からは、今回の調査地点の西方五～六〇〇mの調査区(梶子北遺跡)でも、「大領石山」と記された木簡や絵馬などが出土している(本誌第一七号)。

なお、今回出土した木簡のうち(1)が出土した地点は、一九九九年度の木簡出土地と現道を挟んでわずかに二〇mしか離れていない。

8 木簡の釈文・内容

(1) □刀自女〔若カ〕

(2) □一本せん申受〔種カ〕

(3) □一本〔橋カ〕

(4) □四斗六升

(60)×21×3 081

(160)×30×6 081

195×(28)×6 081

200×(24)×6 081

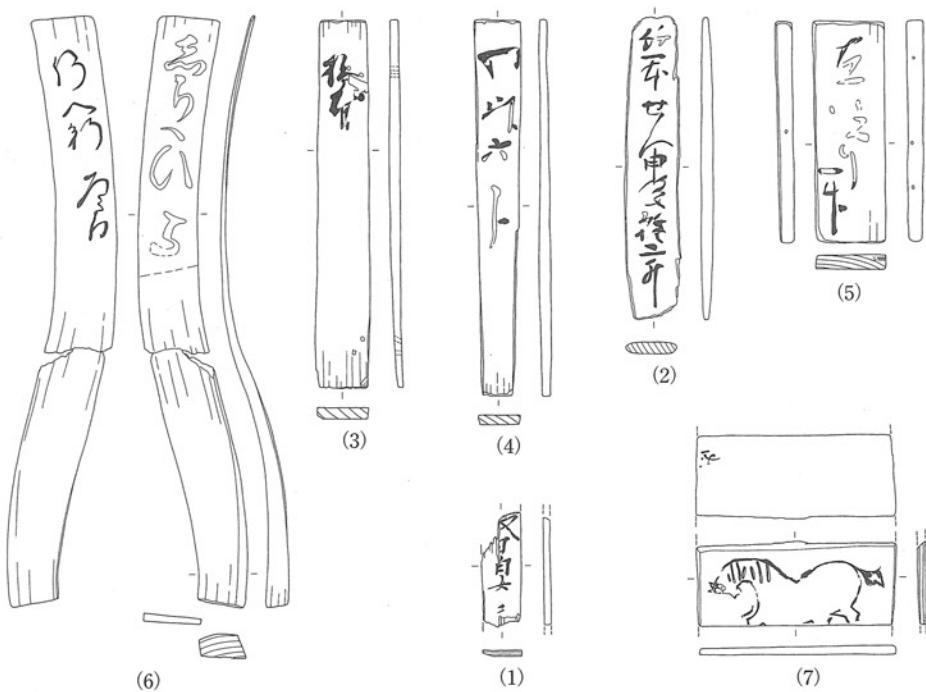
(5) 「左 □ □」
118×37×9 011

(6) 「志らふ□」
「乃カ」
・「□く□□□」
312×33×12 011

(7) 「馬の
轍」
・「□」
(45)×105×5 061

(1)は、旧河道の七世紀から八世紀の包含層から出土した。上部には欠損しているが、左右は削られたままで、欠損はない。一字目の旁は「父」もしくは「反」、下に「刀自女」の三文字がある。少し間が空いて「若」らしい文字がある。中村遺跡周辺の出土文字資料に見える「刀自女」がついた女性名としては、伊場遺跡六号木簡の「若倭部小刀自女」、城山遺跡一七号木簡の「竹田知刀自女」、梶子北遺跡墨書き土器の「千刀自女」などの例がある。

(2)～(6)は、旧河道の中世後半～近世初頭の包含層から出土したもので、詳細な年代は限定できない。(2)は、上下の端部が腐食している。(3)の「橋本」は、人名か地名であろう。(4)は斗量を記すが物品名は不詳。(5)(6)は墨がほとんど消失し、文字は浮き上がり残存している。(5)は、「左」の下に人名があつたと思われる。(6)は、ヒノ



キの割り材を整形しないまま使った粗い作りのもので、「志らふ」と読めるが、意味は不明である。裏面にも文字はあるが、釈読できない。これまで古代の木簡の出土しか知られていなかった中村遺跡で、他の遺構・遺物と結びつく(2)～(6)のような中世以降の木簡が確認されたことは、遺跡の性格を考えていく上で重要な成果といえよう。

(7)は、旧河道の八世紀代の包含層から出土した絵馬である。上辺と下辺を少しづつ欠いている。文字は裏面に一文字確認できるが、読み取れない。

(鈴木敏則)

静岡・箱根田遺跡

はこねだ

1	所在地	静岡県三島市安久
2	調査期間	一九九九年（平11）一二月～二〇〇〇年五月
3	発掘機関	三島市教育委員会
4	調査担当者	寺田光一郎
5	遺跡の種類	官衙（津）跡か
6	遺跡の年代	八世紀後半～一〇世紀
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	



（沼津）

箱根田遺跡は、伊豆半島北部に所在し、東側に箱根山、北側に富士山を望む田方平野の中央部に位置する。遺跡は、駿河湾に注ぐ狩

野川の支流である大場川の右岸に所在し、一二九〇〇

○m²の範囲に広がる。調査

地点の東側は同河川の溢流堆積物が形成した微高地で、北から西側には条里水田が

展開している。

今回の調査は店舗建設に伴うもので、三八八一m²を